

PHOTO
フォト・レポート

撮影●管 洋志
伊藤隼也

素顔の香港

21ページ一挙公開

返還直前の光と影

97年7月1日の香港返還まで、あと240日あまりとなった。一人当たりGNPアジア第3位の「経済大国」が中国と合体するのだ。その歴史的瞬間を前にして、世界中の注目を集める街の真相に迫った。

禁止使用

ビクトリア港に面した灣仔に出現したこの異様な建物は、'97年7月1日の香港返還記念式典の会場ともなる香港コンベンション&エキシビション・センター。総工費48億香港ドル(約720億円)、8階建てで総床面積15.5万㎡(東京ドームの約3倍)、4500席の大会議場を備えた巨大なものだ。国際見本市会場などとしても使用される予定で、返還後の香港のシンボルになる

→大陸から来る中国人が急増している。午前中に九龍塘の駅に列車が着くと、続々と大陸から来た人々が降りてくる。見るからに商売が目的の大きな荷物を抱えた人が多いが、小ぎれいに装った観光客も少なくない。ここ数年で、大陸から密入国ではなく正規の手続きを取って香港に入国してくる人が増え、年間170万人以上が訪れている。



「返還後、さまざまな規制が増えるのはまちがいない。ただ、現在はなにも変わっていないし、返還後も大きな変化はないだろう」

香港の有力誌「亞洲週刊」の邱立本編集長は、こう指摘する。実際、表面的には香港に大きな変化は見られない。繁華街には活気があり、人の流れは波のようで、市場の品物は豊富だ。外国からの観光客もあいかわらず多い。

しかし、この平穏さには理由がある。

香港の多くの金持ちたちは、すでにイギリス本国やカナダなどの居住権を確保し、資産も海外に移すなどして、返還後の対策を完了しているからだ。いっぽう、庶民は海外移住などできるわけもなく、中国人になることをなかばあきらめの気持ちで受け入れているのである。

中国に返還されたからといって、その日から市民の生活が一変するわけではない。返還後も、これまでのように香港政府が香港を統治することに変わりはなく、

この体制は50年間是不変とされている。資本主義経済は堅持され、外国への往来も自由。急に税金が重くなるわけでもなく、行政府に中国の官僚が乗り込んでくることもない。

だが、今後永遠に香港が不変であると信じる香港人もいない。返還後になにが起こっても不思議ではない、とだれもが思っている。

一國二制度という世紀の実験が、来年7月1日、スタートする。



素顔の香港

返還直前の光と影

市場「香港の台所」を席卷する大陸出身者たち

香港島の北角にある市場では、新鮮な魚が安く売られている。このあたりは、大陸（中国本土）から移住してきた「大陸出身者」が多く暮らす、香港の下町だ。この市場に買い出しにくる人々の70%は大陸出身といわれ、市場の商人たちも大陸出身者が増えている。そのためこの一角では、福建語や上海語といった大陸の言葉がひんばんに飛び交っている。北角は、大陸出身者の街になってしまったことから、最近では、中国社会主義革命の発祥の地になぞらえて「香港の延安」とも呼ばれている。



香港は、東アジア唯一のイギリス軍の軍事拠点でもある。九龍の西に浮かぶストーンカッター・アイランドにある英国軍基地では、現在でも射撃演習など毎日軍事訓練が行われている。しかし、返還決定後徐々に撤退が進んでおり、最高時1万5000人近くあった兵力も、いまでは3000人にまで削減されている。第2次世界大戦でイギリス軍をささえたグルカ兵（ネパール人の傭兵）は、現在約1000人が駐屯しているが、今年中には200~300人にまで削減され、その失業問題も浮上している

素顔の香港

返還直前の光と影

イギリス軍

清朝を襲った軍隊は、静かに去る

伝載・二次使用禁

↓香港には海軍も駐屯しているが、哨戒艇などの艦船がわずかに3隻配備されているだけにまで減った。香港海域を常時パトロールしているとはいえ、いまでは中国大陆との緊張感はまったくない



香港全図

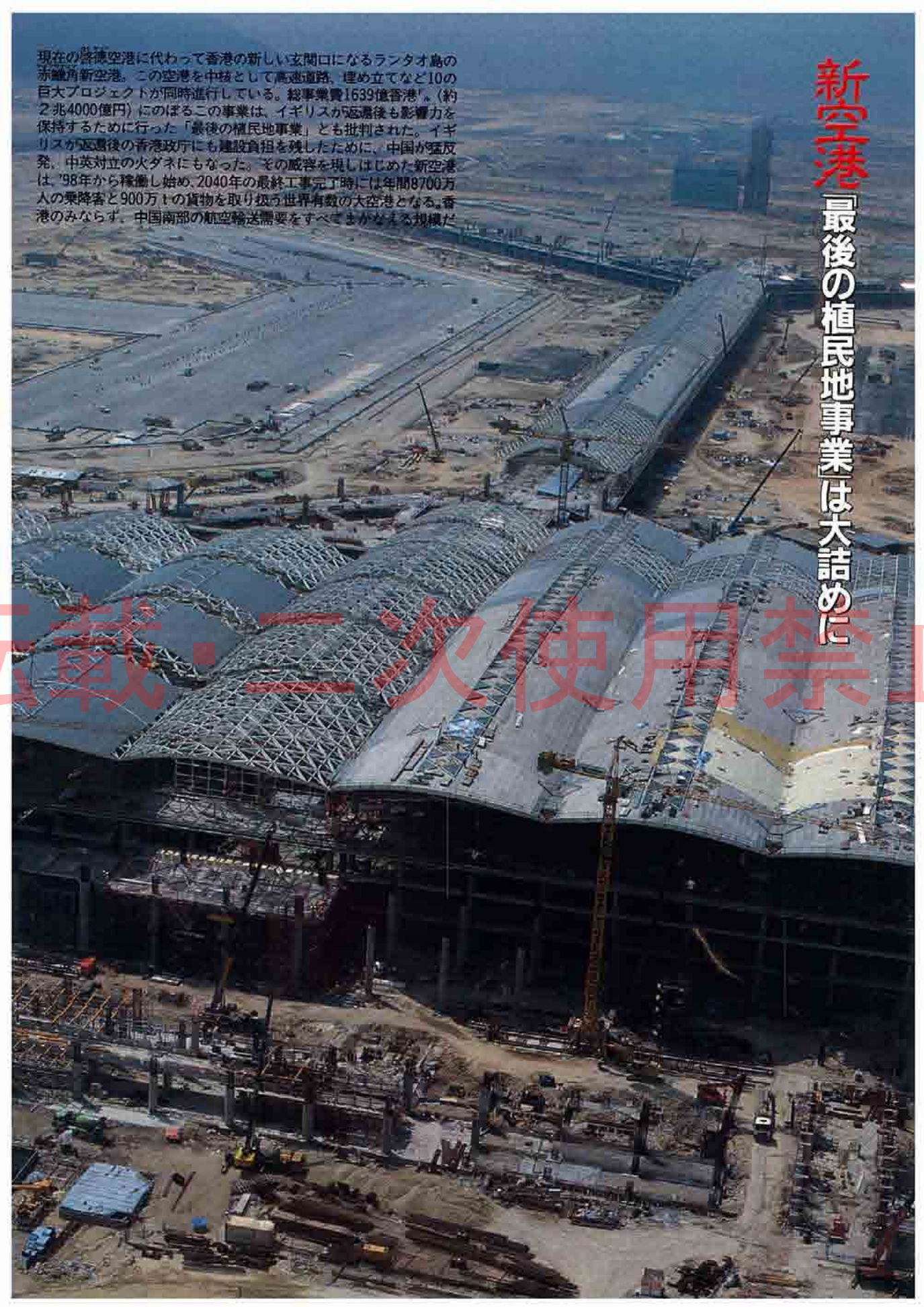
1842年、アヘン戦争で清を破ったイギリスは南京条約により香港島を獲得した。これが植民地・香港のはじまりで、その後イギリスは第2次アヘン戦争にも勝利し、1860年、北京条約によって九龍半島の先端部を取得。さらに1898年、新界地区などを99年間の期限付きで貸与され、左図のような現在の香港が完成された。その後第2次世界大戦における日本軍の占領(1941～45年)、中国の文化大革命下での香港暴動(1967年)などの激動を経て、1980年代に目覚ましい経済発展を遂げる。1984年の中英共同宣言により、貸与期限の切れる1997年7月に中国へ返還することが決定した

新空港

最後の植民地事業は大詰めに

現在の啓徳空港に代わって香港の新しい玄関口になるランタオ島の赤鱗角新空港。この空港を中核として高速道路、埋め立てなど10の巨大プロジェクトが同時進行している。総事業費1639億香港ドル（約2兆4000億円）にのぼるこの事業は、イギリスが返還後も影響力を保持するために行った「最後の植民地事業」とも批判された。イギリスが返還後の香港政府にも建設負担を残したために、中国が猛反発。中英対立の火ダネにもなった。その威容を現しはじめた新空港は、'98年から稼働し始め、2040年の最終工事完了時には年間8700万人の乗降客と900万トンの貨物を取り扱う世界有数の大空港となる。香港のみならず、中国南部の航空輸送需要をすべてまかなえる規模だ

二次使用禁止



赤顔の香港
返還直前の光と影

証券取引所

上場企業の半数はバミューダ籍

アジアの金融センターとしての地位を固めた香港は、株式市場も大規模だ。香港島中環交易広場にある証券取引所「香港聯合交易所有限公司」は、1日平均50億香港^{ドル}（約750億円）の取引が行われる、世界第8位の取引高を誇る証券取引所だ。同取引所には、写真のようなブースが560以上もあり、常時450人以上のスタッフが勤務している。上場564社のうち、大陸の企業も21社が上場しており、返還後、こうした市場が大陸の資金調達のための重要なパイプになることはまちがいない。いっぽうで、英領バミューダに籍を置く企業が279社もあり、数多くの香港企業が海外に脱出している現実を物語る。こうした「空洞化」が懸念されている

香港は変わらない 変わるのは中国だ

朱建栄(東洋学園大学教授)

返還後、香港はどのようなのか。
香港返還を目前にして、世界のいたるところで同様の議論が続いている。
その予測は難しいが、私は、すぐに大きな変化はないのではないかと思っている。

2つの異なるイデオロギーが一国内に同居するのだから、返還後数年はさまざまな摩擦が生じるのは当然なことだ。しかし、香港が社会主義中国になっってしまうのかいっこ、それはありえない。私は、少なくとも20年間程度は、中国政府が約束した「不変」は、その大枠において守られると思う。なせなら、それが中国の国益に合うからである。

中国は、開放政策をはじめて以来現在に至るまで、海外からの投資の目割を、常に香港と、香港を経由した華僑資本に頼っている。自由経済を導入して奇跡的な経済成長を成し遂げた中国だが、この成功は香港の存在なしには考えられなかったのである。領有権を取り戻したからといって、いま香港から経済活動の自由を奪えば香港に籍を置く外資は確実に逃げ出す。金の卵を産むニードルの首をいじめるようなことを中国がするわけがない。

さらには、中国と台湾の対立が続いている限り、中国が香港で自己中心的に振る舞うことはできない。台湾は香港の行方をじっと見守っている。こ



「良族衣装」
「古き香港」は消えていく

で香港の政治体制が覆されることがあれば、台湾は独立に向けて動き出しかねない。

いまは香港を変える時期ではない。中国はそう考えている。少なくとも20年間、香港を現状のまま維持しておき、そのあいたに独自の経済発展を遂げようというのが、21世紀に向けての中国の戦略だ。経済発展は政治改革をももたらすだろう。そうなれば、20年後には中国・香港・台湾と現在ある3つの中国が政治的にも、経済的にも、ほぼ同じ水準に近づいている可能性が高い。中国は香港を変えはしない。台湾統一をも睨み、中国が香港のように変わろうとしている。

←この城塞には、本物の客家の血を受け継ぐ一族が暮らしている。新界の「言大屋」と呼ばれるこの城塞は、1400年の歴史を誇り、百数世帯の客家の末裔たちが住む。彼らの服装はごく普通の現代的なものである

素顔の香港 返還直前の光と影

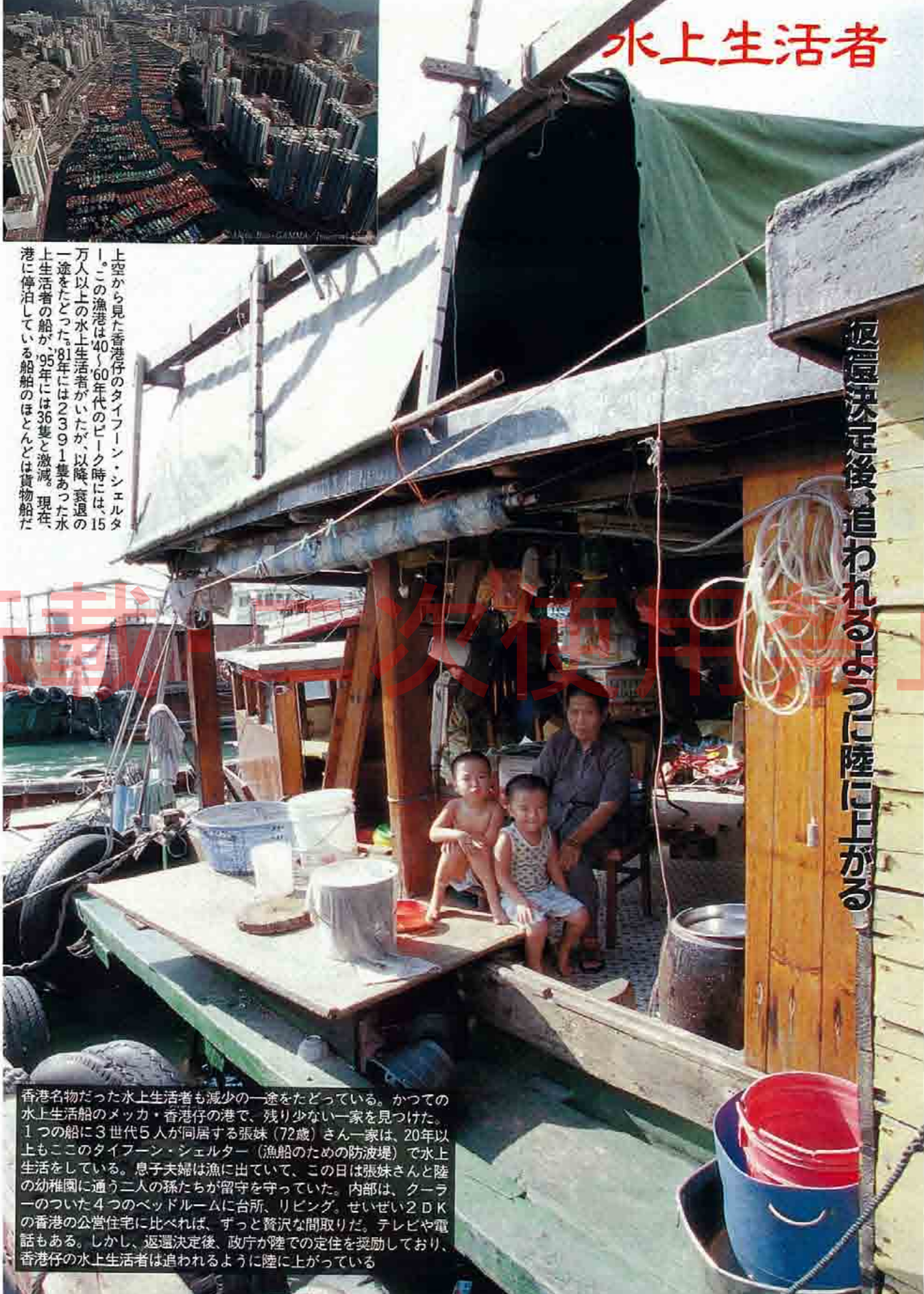


新界にある1400年代につくられた城塞の村・「錦田吉慶圍」に住む老婆たち。かつては、客家（黄河以北から広東省一帯に移住して定着した部族）が住んでいたとされる。この老婆たちの服装は、その客家などが着ていた「民族衣装」である。最近、このような格好をしている香港人はほとんどみかけなくなった。じつは、この老婆たちも本当の客家ではなく、観光客に写真を撮らせてチップを稼ぐために、こうした古い格好をしているのだという。「古き香港」は確実に消えつつあるようだ

水上生活者



上空から見た香港仔のタイフーン・シェルター。この漁港は40〜60年代のピーク時には、15万人以上の水上生活者がいたが、以降、衰退の一途をたどった。81年には2391隻あった水上生活者の船が、95年には36隻と激減。現在、港に停泊している船舶のほとんどは貨物船だ。



返還決定後、追われるように陸に上がる

香港名物だった水上生活者も減少の一途をたどっている。かつての水上生活船のメッカ・香港仔の港で、残り少ない一家を見つけた。1つの船に3世代5人が同居する張妹（72歳）さん一家は、20年以上もこのタイフーン・シェルター（漁船のための防波堤）で水上生活をしている。息子夫婦は漁に出ている。この日は張妹さんと陸の幼稚園に通う二人の孫たちが留守を守っていた。内部は、クーラーのついた4つのベッドルームに台所、リビング、せいぜい2DKの香港の公営住宅に比べれば、ずっと贅沢な間取りだ。テレビや電話もある。しかし、返還決定後、政府が陸での定住を奨励しており、香港仔の水上生活者は追われるように陸に上がっている。

調景嶺

国民党の村への立ち入りは禁止された

九龍の中心から東へ車で約40分。小さな湾を囲いこむような急な傾斜地に、家々が密集している。ここが調景嶺と呼ばれる、国民党の村だ。49年、中華人民共和国の成立とともに、共産党に追われた人々が住み着き、一時期は6000人もの住民が暮らしていた。しかし、返還の前に、中国に「配慮する」と香港政府の立ち退き命令が出され、いまでは無人の村となってしまった。本日にここを離れたくなかった。ここがわたしの故郷なんです。大陸の各地を転々と逃れ、50年に調景嶺に落ち着いたという湯英さん（75歳）。末っ子の張金標さん（32歳）もここで生まれ、村の中学を卒業した。今年10月5日を最後に、ここ調景嶺への立ち入りは一切禁止されてしまった。

●後半グラビアページにつづく

二次使用未



素顔の香港

返還直前の光と影

撮影・伊藤隼也・菅洋志

銅鑼灣の繁華街で、最近流行しているモダンチャイナ・ファッションの女性をみつけた。中国服をアレンジしたファッションだが、返還の影響なのか、これまで「ダサイ」イメージしかなかった大陸ファッションが、いまやパーティで主役の座を占めているという

李偉忠針灸院

LI WAI CHUNG ACUPUNCTURE CLINIC

康民皮膚專科

驗血 癌 孕 尿 病 毒 症

李偉忠針灸院

LI WAI CHUNG ACUPUNCTURE CLINIC

康民皮膚專科

驗血 癌 孕 尿 病 毒 症





禁使用二次・載

↓島には医師などが60人以上常時勤務しており、食事の世話から退院後の仕事の相談まで、すべてめんどうを見ている。回復した患者は、木工や機械工などの訓練を受け、社会復帰に備えている

香港の麻薬中毒患者数は人口の約1.2%、8万人に上ると見られている。'95年の1年間だけで、1万9157人が麻薬乱用で摘発されているのである。その対策のひとつとして、麻薬患者の大規模なリハビリ施設が香港の離島にあることは知られていない。香港島の中環から船で約1時間、石鼓洲に着く。この島に男性の麻薬患者ばかりを集めたリハビリ施設があり、常時200人余りの患者が治療を受ける。政府が援助金を出し、'61年に設立された慈善団体が、患者の受け入れ母体となっている。写真の二人は2週間前に入院したばかりだった。「一番つらいのは2日目くらい。薬が切れてきて、だるくて気持ち悪いし、食欲もなくなる。苦しくてすぐにでも島を脱出しようと思ったくらいだ」。写真右の男性は、2回目の入院だ。返還後、この施設の患者は増えるのだろうか





犯罪

「香港」と大陸のマフィアが暗躍

©Johnny Lamyers SYGMA/Topical Press

マフィアの一斉摘発。彼らの主な収入源は、麻薬の密売、大陸から密入国させた労働者や売春婦の斡旋などだ。ここ数年、香港マフィアと大陸のマフィアが急接近しているといわれ、返還後の治安の悪化が懸念されている

小型の高速モーターボートに中古車を乗せて1台ずつ大陸に運び出す密輸の決定的瞬間。ベトナムや大陸からの密入国者と共に、海路を使った密貿易は昔から水上警察の悩みのタネで、抜本的な防止策はない



©Allan Berg GAMMA/Topical Press

素顔の香港

返還直前の光と影

風俗「空前の風俗景気に出稼ぎ娼婦が殺到

二次使用

返還後、規制が強化される可能性が高い風俗業界は、いまが最後とばかりに、空前の好景気。高い稼ぎを求めて、大陸から娼婦が数多く入りこんでいる。青島から観光ビザで来た21歳のこの娼婦は、「カラオケバー」で客をとり、1回1500～2000香港。(2万2000円～3万円)で1日3～6人の相手をするという。「香港で体売るのはアルバイト。1年に何回か来てある程度おカネが貯まったら青島に帰る」。香港警察が発表した統計によれば、1日平均73人('95年)の密入国者が大陸から押し寄せている。このうちのかなりの部分を、娼婦が占めているといわれる



ベトナム人収容所

新界にあるベトナム人収容所「白石羈留中心」を有刺鉄線と鉄条網越しにのぞく。現在7079人のベトナム人が収容されている。返

還後の彼らの処遇はまだ決まっていない。73年5月に最初のベトナム難民が香港に上陸して以来、数多くのベトナムからのポードビープルが香港に流れついた。79年から'96年8月までに延べ18万5071人が香港に上陸したが、このうち難民の認定を受け香港に定住したのは、わずか579人。他はアメリカなどに移民している

フィリピン人

香港に住む外国人の中で最も多いのが、中流家庭でメイドをしている出稼ぎのフィリピン人だ。現在推定13万人いるといわれ、日曜日には中環の広場やその周辺

に集まり、故郷からの手紙の交換やおしゃべりをして一日を過ごす。彼女たちがもらう給料は、香港の法律で定められた最低賃金、月給3750香港ドル(約5万6000円)程度で、その半分は国へ仕送りをしているという。この光景は、返還後もみられそうだ





死亡した陳毓祥氏の葬儀が10月6日、香港島の北角で行われた。香港での反日感情は根強く、取材許可を取って参加したにもかかわらず、警官から立ち去るように警告された
10月5日、台湾から出発する尖閣行きの船に乗り込むため啓徳空港を出発する総勢200人以上の有志と、それを見送る人々。彼らの一部が、2日後の10月7日に尖閣上陸を強行した

釣魚島 今年9月半ばから10月初旬にかけて、尖閣諸島（中国名 釣魚島）問題で香港が沸騰した。9月26日、尖閣諸島問題を巡る反日運動のリーダー的存在の陳毓祥氏が、尖閣諸島沖の海に飛び込み、溺死したことで運動の盛り上がりは一挙にピークを迎えた。この異様な熱狂は、「返還を控え、中国に対して点数を稼いでおきたい香港人の過剰反応」あるいは「民族主義を盛り上げたい中国の意向が働いたから」ともいわれている





民主派主席
李柱銘

弁護士でもある58歳の立法評議会議員。85年に政界入りし、返還後の人権擁護を主張して、民主党を評議会最大政党に押し上げた。返還後の不安は数多いが、私がかつとも憂えているのは、香港人の人権がきちんと守られるかどうかという点だ。中国は、中英共同宣言で決めた約束を、すでにいくつか反古にしている。したがって、香港の法治と司法権の独立を、そして人権の尊重を、す中国の専制的なシステムによって破られてしまう可能性は非常に高い。だから私は中国に対してはつきりものをいう。これまでもずっとそうだったし、97年以降も変わらないう。返還後は獄されるかもしれないが、香港から逃げ出すつもりはない。あくまで信念を貫き通したい。



民主派議員
劉慧卿

ジャーナリストとしてさまざまなメディアに携わった後、91年から立法評議会議員になった44歳。返還が近づくにつれ、まず財界人のほとんどが親中派に転向したが、最近ではメディアの転向がはじまっている。自由と民主の牙城であるべきメディアが、自己の保身を図って中国に露骨なすり寄りを見せている。私は毎朝十数種の新聞に目を通しているが、日に日に中国の意向に沿うよう報道が偏向してきているのは明らかだ。返還前ですらこんな状況なのだから、返還後の言論の自由が保障されるかは、たいへん心許ないといわざるをえない。なによりも、言論界では、こともあらうにまだ弾圧を受けていないのに自主規制が先行しており、情けないというほかはない。

政治家

大戦



起業家

新界で映画スタジオを経営するオーナー社長、鄧文偉氏（40歳）。月収150万香港ドル（約2200万円）を越すという香港の大富豪だ。スタジオ経営のほかにも、学校、最新の生

バンドの演奏を聞けるという。趣味は車で、ロールスロイス、フェラーリをはじめ7台の高級車を乗り回している。返還後も香港に残るとい

↓「華亭飯店」のオーナー・シェフ、孟筱華さん。数ある香港の中華料理店でも、女性のシェフは彼女一人だけという。'89年の「世界美食協会」でNo.1に選ばれたという腕前で、この店に集まる客は、政府関係者、映画俳優など幅広い。中国の高官が香港を訪ねると、必ず立ち寄る名店として知られ、返還後も店を開ける予定はない

↓世界に約200店舗を持ち、日本でもなじみのある洋服ブランド「THEME」。この女性副社長が蘇逸玲さん（35歳）。アメリカの有名ブランドからヘッドハンティングされた。デザインから品質管理、プロデュースまで全て彼女が担当するという。香港のサクセスストーリーを地で行く女性だ。返還については「うまくいく」と楽観的だ



素顔の香港
返還直前の光と影

国境
フェンスと検問所は残される

新界の北、落馬洲上空から中国・深圳市との国境を望む。写真下方に池のように点在しているのは養魚場で、のんびりとした田舎の風景が広がっている。その先に国境の金網があり、その向こうの真新しいビル群が深圳だ。返還後もこの金網は残され、中国と香港の間の自由な往来は許されない。中央の道路上の白い建物が検問所。これは返還後も存続し、ビザを所持した中国人しか、香港には入ることはできないという。しかし、他地区との自由往来を禁じているはずの深圳にも、中国全土から無許可で「盲流」とよばれる農村から出てきた不法労働者たちが押し寄せた。それと同じようなことが香港に起きても不思議ではない。返還後、これまでよりはるかに多くの中国人が大陸から香港に入りこむだろう